

慢性腎臓病

▷▷▷ 酸化ストレス原因

東北大東北メデイカル・メガバンク機構の山本雅之教授(医化学)、
 祐津昌広助教(内分泌内科)らの研究グループは「酸化ストレス」が慢性腎臓病の原因になることを解明し
 たと発表した。

酸化ストレスは、細胞を傷つける分子が細胞内にたまった状態。心不全や敗血症、腎移植などで腎臓に過剰出現すると急性腎障害を起こす。

研究グループは、酸化ストレスを除去できる特定のタンパク質を活性化させたマウスを使い、腎臓への血流を止めて急性腎障害の状態を再現したところ、病状の進行が抑えられた。普通のマウスでは、2週間後に慢性腎臓病へと進行した。

また、急性腎障害を起こしたマウスに特定のタンパク質を活性化させる薬剤の投与を試みた。5日以内の投与では慢性腎臓病への進行が抑えられたが、7日目以降では改善が見られなかった。祐津助教は「腎障害が起きてからでも早期治療が有効と分かった」と話した。

東北大研究グループ解明

微小血管狭心症

心筋梗塞などと同じ虚血性心疾患「微小血管狭心症」の診断に、心筋内の炎症で増加するとみられる物質「セロトニン」が利用できることを、東北大大学院医学系研究科の下川宏明教授(循環器内科学)らのグループが突き止めた。血液検査による簡易診断に道を開く成果だという。

研究グループは、血管を収縮させたり、血小板を凝集させたりする物質「セロトニン」に着目。心疾患患者(198人)から採血して血中のセロトニン濃度を分析した結果、微小血管狭心症患者(66人)で高い値を示した。

微小血管狭心症の可能性を診断する場合、血液1リットル当たりのセロトニン量は「9・55ナノモル以上(1ナノは10億分の1)」が基準値になるという。

微小血管狭心症は、閉経後の女性に多く発症し、更年期障害や自律神経失調症と間違われこともある。造影検査での発見が困難で、正確な診断には現在、心臓カテーテル検査が必要とされる。

セロトニンで診断 ◁◁◁

2016年(平成28年)11月1日(火) 河北新報
 ※転載許可取得済み